

舞 だうん

Vol. 75



アングル

「生きる力応援団」—いきいきいわみの取り組み—

いきいきいわみ運営委員長／寺本 恵子 …… 1

◎集

『人に優しい地域づくり』

みんなで乗ろう、みんなの路面電車	松山市／田村 俊夫 …… 2
NPOでつなぐ新しいネットワーク	今治市／山本 優子 …… 4
留学生たちと一緒にまちづくり	松山市／藤本イツ子 …… 6
心のふれあいを通して学んだこと	久万町／渡部嘉津彦 …… 8
世代を超えて…	津島町／田村 裕子 …… 10

論談—まちづくり—

ユニバーサルデザインとまちづくり

独立行政法人建築研究所 首席研究員／古瀬 敏 …… 12

キラリ光るまち

いきいき御調

広島県御調町／村上 重紀 …… 14

引き算型まちづくりの事始め (六)

内子町／岡田 文淑 …… 16

トクナウ

農業が元気じゃなくっちゃ!

久万町／竹森まりえ …… 18

私流のまちづくり

波方町／越智 文香 …… 19

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩キ目デス&足ラテス

津島町ウォッチング・パート2「共生と調和を楽しむ」

岡崎 直司 …… 20

媛のかわら版

キャンペーンおばさん (その2)

松野町／隅田 深雪 …… 22

研究員レポート

イベントについて考える

池田 大作 …… 24

住民が参加しやすい環境づくり

奥山 清司 …… 26

BOOK INFORMATION

information センターからのお知らせ …… 28

特集

「人に優しい地域づくり」

最近、「ユニバーサルデザイン」という言葉をよく耳にするようになった。この言葉は、アメリカのロナルド・メイス氏が提唱した概念で、「出来るかぎり最大限すべての人に利用可能であるように製品、建物、空間をデザインすること」と定義されている。

阪神淡路大震災以降、安心安全のまちづくりが大きなテーマになり、また急激な少子高齢化により、ユニバーサルデザインへの関心が高くなってきている。こうした状況の中、各地域において、福祉のまちづくりに向けた取り組みが行われているところであるが、その対象となる人たちは、高齢者や障害者、被災者、外国人など確実に拡大していくものと思われる。

そこで、今回は、それぞれの地域において、様々な形で、「人に優しい地域づくり」を実践されている方々に登場していただいた。

(編集子 山下)

表紙の言葉

潮風受けて夕やけこやけラインを走る。

鳥居を潜り、石段を上がる途中振り返るとJR長浜線が走っている。三島神社である。石段は百七十一段。一息入れるに良い神門が途中待っている。神門は扇のように広がりが美しい。この門を額に見立て、船の中に収めて眺めるのが通の見方らしい。

今年も勢い良く、船出を望み穏やかな正月の初詣で。

双海町・三島神社

柳原 あや子



「生きる力応援団」

—いきいきいわみの取り組み—

いきいきいわみ

運営委員長 寺本 恵子



「待った、待った、しばらく待った。幕引き止めて、誉める言葉は知らねども、花にたとえて言うならば・・・」、車椅子の観客から勇ましく口上がかかる。恒例のデイサービスセンターへの出前敬老会での打ち上げのひとこま。老いても、いきいきと生きていくことの出来る町づくりを合い言葉に歩き始めた会「いきいきいわみ」が、地域での敬老会に参加出来ない方達のために、「敬老会の出前」を始めて十年になる。言葉少なになりがちなお年寄りに腹の底から笑って欲しいと、汗をかきかきの迷演技と、あふれる思いに泣き笑いの顔・顔。返し口上を必死で覚えなくてはならない私達とは大違いのお年寄りの口上の

タイミングの良さと滑らかさに、こんなふう
に皆で楽しみながら生きてこられたであろう
往時が思われて私達もまた泣き笑ってしまふ。
手をしっかりと握りながらの「また来年も来ち
ゃんさいなあ」の声に送られる時、来年のこ
の集いの日まで、また元気に生きたいという
確かな気持が感じられて私達仲間は笑顔で領
き合う。「ねえ、障子張り、いつから始める？」
「今年は寒さが早そうだから、そろそろ始め
ようよ」、一人暮らしのお年寄りが正月に都
会から帰ってくる子供達を笑顔で迎えるため
の障子張りの手伝いの相談に時々笑いがはじ
ける。ボランティアという言葉では言い尽く
せないありのままの心が温かい。介護保険制
度が施行され、社会全体が介護の社会化へと
その意識改革と仕組みの整備に向かい始めた
ことは、「介護は貴女の役割」と位置付けら
れてきた女の長い歴史に大きな変革をもたら
そうともしている。三百 人を超えた仲間達は
「福祉って幸せってことだよな」という言葉
を共有している。福祉サービスの充実も「幸
せ」の大切な条件の一つであることには違ひ
ないが、「よーし年は取ったが、もうちょつ
と頑張って生きてみようかい」などと言いな

がら暮らせることが一番の福祉とも考えてい
る。その「幸せ」の条件を作るためにこそ行
動したいと語りながら、仲間の輪を広げてき
た。人は生きていこうという気持があるから
こそ生きていけると常々考えている。自分達
の幸せづくりのために住民が出来ること、い
や地域で共に生きる住民同士だからこそ出来
ること、それは「生きていこう」という気持
ちを応援し、支えることをおいて外にはない。
住民の手足となつての直接的サービスと、目
耳や口を駆使しての生きる力応援団とが互
いを活かし合える町に生きたい。



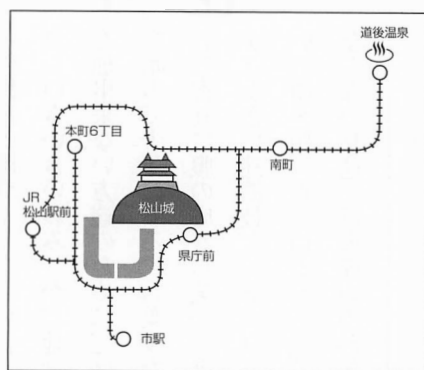
出前敬老会

みんなで乗ろう、 みんなの路面電車



松山市
マドンナ電車からまちづくりを考える会
(マドンナLINK)

事務局長 田村 俊夫



「マドンナ電車いうたら、坊っちゃん列車の親戚みたいなもんかいのお」とは、私たちの会に寄せられる巷の声。特に昨秋から松山の市内中心部を坊っちゃん列車が走り始めると、その頻度はさらに多くなった。よくよく話を聞いてみると、マドンナだけにお祭りの時などに走る花電車やイルミネーションに飾られた電車のイメージを、勝手に膨らませて語る方々が多いのには恐れ入った。やっぱり『路面電車からまちづくりを』と、ストリートにつけときや良かったかなあ、としみじみ思う今日この頃ではある。

人にも、街にも、環境にもやさしい

路面電車と聞けば「あ、昔なつかしいチンチン電車ね」と思われる方も多いのではないだろうか。颯爽と駆け抜ける最新の自動車の横を、ゴトゴトとのんびり走るイメージが定着している感がある路面電車も、海外を中心にそのスタイルは大きく変貌している。いわゆるLRT(ライトレールトランジット)と呼ばれる超低床で走行性能の優れた高規格車両を使い、都市の隅々まで路線網を張り巡らした交通システム、それである。特に欧州各国では導入が盛んで、松山市の姉妹都市でもあるフライブルクやフランスのストラスブールでは大成功を収めている。そのメリットは数々あるが、なかでも高齢者や子供、妊婦、障害をもつ人々といった社会的弱者を中心とした人にやさしいことがあげられる。超低床であるがゆえに乗り降りが楽であることはもちろん、上がったりがつたりが必要ない地下鉄や高架式の新交通システムと違い、道を歩きながらその気になったらすぐに乗れるという点。また、乗合バスとのネットワークによってより緻密な交通網を形成し、自家用車の使用を低減させ、都市の渋滞緩和や道路の汚損、騒音減少など環境改善に役立つのが二点目。さらに、自動車からの排出ガス低減や消費エネルギーの効率化などによって、地球温暖化といったグローバルな環境への貢献や、都市全体のバリアフリー化促進、少子化対策のなかでも子育て環境改善の一助として厚生労働省の施策に盛り込まれるなど、枚挙にいとまがない。いささか言い過ぎかもしれないが、LRT導入に対するデメリットなどはほとんど聞いたことがない。私たちが提案している道路車線を利用した新線建設に対して、道路管理や警察行政側から渋滞の増加を危惧する声もあがっているようだが、導入先進国では関係者の努力と協力で見事に解消

していることも付け加えておきたい。

まちづくりを住民の手で

当会は松山という都市と住民の財産でもある路面電車を中心とした、公共交通機関が主体となったまちづくりを自らの手で進めることを目的として、平成十二年四月に設立された市民団体である。活動の中心となっているのは、運営の中核をなす役員会のほか、市民レベルのまちづくり計画を策定するプランニング部会、老若男女、幅広い年齢層の住民に設立目的の理解促進、啓発を行うイベントを実施するイベント部会と会の活動を各方面に伝える広報部会という三つの部会によって運営されている。

設立初年度、プランニング部会を中心に当会設立にも深くかかわった産官学のシンクタンク、えひめ地域環境研究会(通称…R.E.E)と連携しながら定期的に勉強会を開き、市民の手による提言をまとめた。これは、廃止された伊予鉄道森松線を国道33号線の車線を使って復活させる、低部LRT新線を中心に松山の路線網を再構築するものであり、路線図やその根拠を記載した提言書は、愛媛県知事や松山市長といった関係自治体首長、鉄道事業者に直接手渡されている。LRT

導入の先進地である欧州、フランスとドイツにも有志で視察に出かけ、見聞したことを報告書にもまとめた。また、より身近な活動の一環として、子供たちに向けた夢電車の絵の募集や路面電車をテーマにした工作などを行う『まつやまキッズ電車プロジェクト』、松山市主催の『みんなの生活展』参加といった啓発も積極的に行っている。

会の設立に当たって名前をどうするか?という段になり候補にあがったのが『マドンナ』の名称。人にも、街にも環境にも『やさしい』というイメージを端的に、松山らしく伝えるにはうってつけという結論にいたったわけだが、冒頭に述べたように本来の趣旨とは違うとらえ方をされることが数多い。これもまだ



子供たちと一緒に路面電車の未来を考える
「キッズ電車プロジェクト」



松山市主催の「みんなの生活展」
当会展出ブース

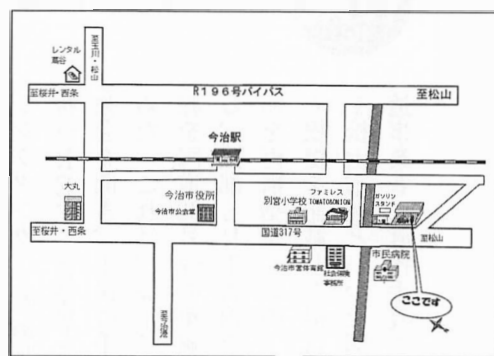
まだ私たちの活動が浸透していない証に他ならず、これからもより一層の努力を続けていきたいと考える次第。

『みんなで乗ろう、みんなの路面電車』というタイトルどおり、私の拙文を読まれた皆様には、できうるかぎり路面電車をはじめとする公共交通機関を利用していただきたいものである。一人でも多くの人が利用することで、アクセスはより便利に、身近なものになり、にぎわいのある、暮らしやすいまちに近づくことは間違いない。実際に欧州でその姿を目の当たりにしてきたし、欧米人にそれができて、私たちにできない、ということはないはずだから。

NPOでつなく 新しいネットワーク



今治市
今治NPOサポートセンター
事務局長 山本 優子



震度五強をもたらしただ芸予地震から、早や二年近くが経とうとしています。私たちの団体は、当時、ひとり暮らしのお年寄りの屋根にシートを張ったり、瓦礫を片付けるお手伝いをしたりするボランティア活動を展開しました。災害支援を目的に動いている団体ではない私たちが、災害ボランティアセンターを立ち上げたのです。「困っている人がいるから、ほっとけん」という気持ちを抑えられないままに立ち上げたのが実情ですが、今振り返って見ると、その選択は正しかったと思います。災害ボランティアセンターには、多くの人と情報と物資が集まりました。毎日、ボランティアを「してほしい人」と「したい人」の調整をし、現場での救援活動に行ってもらう、そのコーディネート機能をつつの間にか担っていたのだと思います。

あの時、行政が設置する「災害対策本部」は地震発生直後に設置されていました。それとは別に、民間で立ち上げるボランティアセンターが機能していったこととなります。これは、行政とNPOやボランティアなどの役割が違うからなんですね。災害のような緊急を要する事態が発生したとき、行政はどうしても機動性を失いがちです。それは、仕方がないことです。行政は「公平・平等」の原理で動いているのですから、全体を把握してからでないと支援を始められません。でも、ボランティアやNPOは、気付いたところから支援できるのです。非日常の活動は、日常的な価値判断や命令系統では間に合わないことがたくさんあります。それでもやらなきゃならない。そんな活動は、個々の判断に従って活動を行えるNPOだからできるのだと思います。そんな民間のセンターに、地域のNPOやボランティアなど多くの人が関わり、そして行政や社会福祉協議会との連携もとつつ、支援が展開できることが有意義です。災害ボランティアセンターが機能したのは、二週間余りだったのですが、色々な人のアイデアとパワーが集結していました。ボランティアの個々の思い付きが多彩さにつながる例をたくさん見せ付けられました。「今、こんなサービス



芸予地震のボランティア活動

が必要ではないか」と、ボランティアがそれぞれの感覚で発想するサービスを全体に捉われず実現していくことで、必要即応の活動が展開できました。

これらの例は災害時だけではなく、日常時も同様のことが言えると感じています。「自己実現」や「生きがい」といった個別的で多様な価値が求められるこれからの社会は、行政の社会サービスだけでは対応できなくなっている時代と言えます。つまり、公平な行政と営利を目的とした企業に加え、営利を目的とせず柔軟な活動が展開できるNPOが、地域社会を支える存在として注目されているのです。私たちの団体が活動を展開している今治市・越智郡地域にも、多くのNPOが様々な地域づくりに携わっています。地域づくりは、本来そこに住む人々が行政任せではなく、自分たちの生活の中から出発して、自分たちの意見を出していかなければならないはずのものです。住民の側からどう地域を創っていくのか、その住み手の側の参加の手段としてNPOがあるのです。

市民参加の手段としてのNPOという道具を、どう使うか。今、行政と市民双方が、真剣に考えないといけない時がきています。複雑多様化する地域の課題は、



市民参加のワークショップ

行政のみで解決するのは難しく、市民自らが行政と協働して課題解決に当たって

いくことが求められます。最近、私たちの団体の仕事も、行政や企業との協働を考えるものが多くなりました。来年四月から始まる「障害者支援費制度勉強会」や「今治新都市の中の公園整備を考える勉強会」など、市民を巻き込んでワークショップなどを繰り返しています。みんなの願いや思いを表出させるために、丁寧に話し合いを重ねている段階です。もちろん、最初からうまく協働が進むものではありません。価値観も手法も違う相手と一緒に何かをしようとすれば、そこに摩擦が生じることも多々あります。議論や作業を通じて、相手を尊重し、互いが学びあいながら、信頼関係を築いていくところです。

活動を通じて感じることは、活動の善

し悪し、可能性の有無といったような判断をする力を含め、うまく人々の気持ちを仲介するコーディネート力が重要であるということです。そして、そのコーディネーターはビジョンを持てる人でないといけません。明確なビジョンを持って、活動を組み立てる力がないと、地域の支援は得られませんからね。どんな人を巻き込みながら、「あつたらしいな」を「かたち」にできる、そんなサポートセンターを目指していきたいです。

私たちの団体の取り組みは、芸予地震の救援活動から始まったといっても過言ではありません。ネットワークの重要性、また、地縁組織やNPO、行政等の連携体制、人や仕事の調整をするコーディネーターの必要性を、あの時、痛感させられたのです。災害は、地域の課題を浮き彫りにすると言います。弱いところが見えやすくなるのです。そして、災害時に弱いところは、日常でも弱いところ。課題解決に向かって歩み続けることは、災害に強い地域というよりは、災害にも強い、人にやさしい地域づくりにつながると思います。「今、地道にやっている活動が、災害の時にも役に立つかな・・・」と、そんな思いで活動をしている今日この頃です。

留学生たちと一緒に まちづくり



松山市
CAS (キャス)

代表 藤本 イツ子



CAS (キャス) は、平成十年四月から、地域に暮らす外国人を同じ地域に暮らす隣人として受け入れ、さらには障害者や高齢者も含め、すべての人々が互いに理解し、学びあえる地域づくりを目指して活動しています。

主な活動の一つに、各家庭にある余剰品のリユースを通して、留学生の生活支援をするというものがあります。それは、地域の各家庭にある「まだ使える生活必需品、例えば布団、電化製品、家具など」を集め、集めた生活必需品を倉庫（上高野町）に整理・整頓して収納します。それを主に留学生に使ってもらうという活動です。

元々は、まだ使える物をゴミにしないということから始まりました。ある人にとってその物は不要でも、ある人には必要かもしれません。また、ゴミにすれば焼くための燃料などに経費がかかり、環境にも悪影響を及ぼします。

まだ使える物をもう一度使う（リユース）活動は、使う人が短期滞在の留学生であったことから、国際理解と国際交流活動に結び付けました。そして、留学生のために役立てたいと言って余剰品を提供してくださる市民から、倉庫整理に参加する地域の人たちや障害者、留学生ま

で、大勢を巻き込む活動に発展しています。

生活必需品の収集作業は、概ねCAS 会員で担当しますが、留学生も研究の合間に市民の家まで行くことがあります。CAS が一方的に働くのではなく、留学生もCAS の収集活動に関わり、また、別の活動、例えば国際理解の講座などに参加・協力しています。

例年秋には、生活必需品を収納している倉庫の大掛かりな整理・整頓作業をします。「ワークパーティー」と呼ぶこの整理・整頓の作業日は、留学生とその家族、地域の人たち、障害者など大勢が集まり、皆で肩を触れ合い、微笑み合いながら働き、作業が一段落すると、いもたきを食べながら交流をします。定番となった「いもたき」は留学生たちに「いもスープ」と言われて好評です。いもたきの材料は企業から提供を受けています。誰かが留学生の分を負担するのではなく、地域の人も留学生も皆が同じように働いた代償として、いもたきを食べているのです。食材提供という企業参加を得て、皆が腹の底からものを言い合い、笑い合える関係が出来上がりました。

このワークパーティーは、メディアの取材を受けて大きく報道され、広い地域

で知られるようになりました。そして、余剰品の提供者から続々と情報が寄せられ、留学生たちの欲しい物が大量に集まりました。また、報道されたことでCASの会員は自信を持ち、元気になり、家族の協力や理解が増しています。この自信は、愛媛県や松山市の環境や消費政策へ提言する意欲につながり、何人ものCAS会員が審議会等の委員として活躍中です。

そして、この委員たちを中心に、昨夏には、本当に必要な物を必要な量だけ買うグリーン購入を啓発するためのイベントを開催しました。グリーン購入イ



食器の整理（倉庫の中）



いもたきパーティー

ベントは、小学生親子を対象にした「地球に優しい買い物体験」とし、スーパーマーケットで買い物をした後、愛媛大学農学部で買った物を検証するというものでした。これは、普段の物集めの活動の中で、各家庭に大量に余剰品があるのを知り、グリーン購入の必要性を感じたことから企画できました。このように活動の中からの気づきが、次の活動を生みま

す。

CAS発足から五年の間、新しく来松した留学生が生活するための殆どの物を倉庫に揃えています。この活動は他の地域にはないシステムだと留学生たちに感

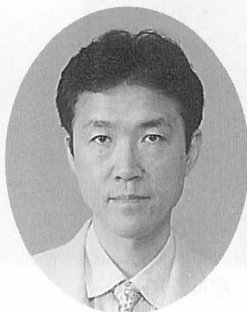


グリーン購入参加者親子
(会場：愛媛大学農学部)

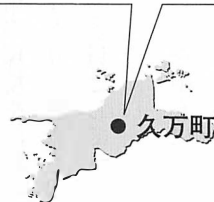
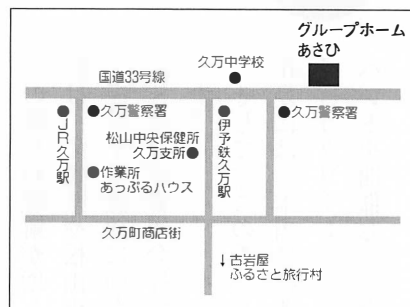
謝されてきました。感謝の気持ちに支えられてCAS会員は作業し、留学生たちと共に喜び、様々に学ぶことが出来ました。昨年のリサイクル法の施行から後、生活必需品の提供申し込みが少なくなり、したが、リユース活動を続けていく中で、今後も環境に厳しい目を向けていきたいと思っています。

また、会員から、NPO法人にしたいという意見もありますので、このことも視野に入れて、周囲の状況に配慮しつつ、あらゆる立場の人々との協働・共生を目指して活動を続けていきたいと思っています。

心のふれあいを通して 学んだこと



久万町
精神保健ボランティアゆきんこ
会長 渡部嘉津彦



「精神病いうたら、どんな病気ぜ？」
「その病気は、治らんもんなん？」
「精神障害者いうんは、どんな人らぜえ？ 知的障害とは違うんけえ？」

私に今まで何度も投げかけられた質問ベスト3です。今でも、精神科医でない私には、完璧にはお答えすることはできません。五年前、私も確かに同じ質問をしていたのですから…。

不安だらけの船出

平成九年、当時の久万保健所の主催で、『精神保健福祉講座』が開講されました。心の病に興味のあった私は、早速に受講。精神障害者の方々が当時置かれていた立場、福祉行政のかなりの立ち遅れ、家族の方のご苦労、そして私たち地域住民の無知と無関心。それらを嫌というほど思い知らされたのです。そして、翌年二月、行政と障害者の方々との架け橋となり、縁の下での力持ちになろうと決意した受講者で、ボランティアグループを結成しました。名はゆきんこ。愛媛でも雪の多い地域であると同時に、白く無垢な心と、春の雪解けを待つ心をこめて命名したのです。

しかし、私たちにいったい何ができる

のか、何からすればよいのか、不安を抱えたままでの船出でした。

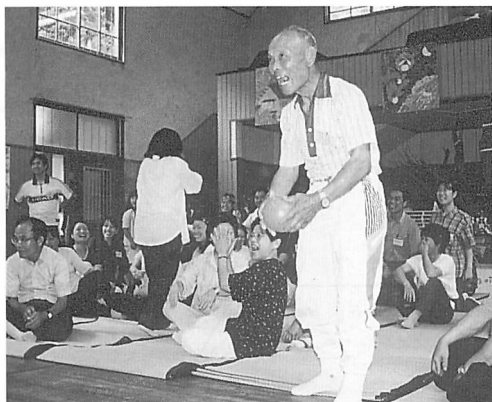


カメラに向かってハイ、チーズ

メンバーさんとの交流を通して

メンバーさん。精神障害者の方を私たちは親しみを込めて、時にこう呼ぶことがあります。ゆきんこの一番大切な目標に、「メンバーさんと友達や仲間になれたいいなあー」という思いがあります。地域の一人一人が、病気を理解し、メンバーさんとごく自然に暮らせる地域を目指したのです。

でも、そこに高いハードルが出現しました。知識でしか理解していない私たちは、メンバーさんとうまく接してよいものやら悩んでしまいました。



小田深山での交流会

「何を話したらええんじゃろ?」
「ちよつとまずいい言い方をしてしまったんじゃが、だいじょうぶかのう?」
「何か話かけるんが怖いわい」
作業所（精神障害者社会復帰施設）で、メンバーさんとお会いしてから何度目かのある日。その日も何気なくドアを開けて入っていくと、「こんにちは。今日はぬくいなあー」のメンバーさんからの一言。やつと彼に認めてもらったという嬉しさで、「ほうじゃなあー」としか言えなかった私。今思えばあの頃の私は、自分でメンバーさんとの垣根を作っていたに過ぎなかったのです。怖いというイメージもすぐに消え去り、本当に優しいナイーブな方ばかりだと知りました。

グループホーム設立に向けて

お付き合いが始まって二年目。私たちの次の目標は、グループホームの設立でした。病状も落ち着き、病院を退院できるにもかかわらず、家族のご都合や地域の根強い偏見により、長期入院を強いられている人のなんと多いことか。その方々が故郷に帰って生活できる共同住居がそれです。「わが地域にも是非一つ」が、家族会の念願でありました。

資金不足のため、既存の住居を探す術しかなく、町の中で作業所にも近い家となると、おいそれとは見つかるものではありませんでした。しかし、丁度その頃、行政所有の老朽化した寮が空くことを知り、条件もすべてクリア。早速に町長さんに嘆願書を提出、町議会議員さんには事情をご説明にお伺いし、何とかお借りすることができたのです。

しかし、そこまでの道程は厳しく、冒頭の質問を行政の方々から幾度されたか分かりません。議会で一度は否決されたくらいなのです。でも、こちらが心を開き、誠心誠意お願いすれば、気持ちに通じ合える。すでにメンバーさんから教えられていることでした。

こうして、現在四名の方がグループホームで生活されています。

人に優しく、自立した地域づくり

非難や対立からは、何も生まれません。地域に暮らす一人一人が、小さくても目標や夢を持ち、それをあきらめないこと。そして、それらを叶えるべく、少しの勇気を持って、第一歩を踏み出すこと。その歩みはのろくとも、自分も他人も偽らず、心を開いて対話し、信頼しあうこと。私が、あなたが自立し、優しい心を持ち続けることができたならば、私たちの住む地域もきっとそうなると思っています。すべては、障害を持ちながらも、地域で暮らしたいと願う人たちが学んだことです。



お揃いのハッピーでバザーに参加

世代を超えて…



津島町
くじら飛行

会長 田村 裕子



若者の力

私が彼らと出会ったのは、「津島やすらぎの里」のオープンを記念して私たちがくじら飛行が「夢飛行機コンテスト」を実施したときでした。

津島高校のチアリーダー部とVYS部の二十二人がスタッフとしてお手伝いしたいと声をあげてくれたのです。持ち前の明るさとパワー溢れるチアリーディングで場を華やかにしてくれる彼女たちや、子どもたちと本気で向かい合い真剣に接する彼らは、それからというもの、私たちの活動には欠かせないスタッフとなりました。

彼らと行動を共にしていくうちに「こんな私にも何か人の役に立ちたい」という強い思いを聞いたり、障害を持った子どもたちと接して、頑張っている姿に心を打たれ涙する彼らを見ると、かつて自分も感じていた、熱い想いを思い出させてくれました。

また、小学生は六年生を中心に「清満わんぱく隊」を結成。

地元のお年寄りにインタビューをして地域の宝物や昔話を聞いてお年寄りの「自分史づくり」を実施しました。最初は恥ずかしがっていた子どもたち

も、何度も回数を重ねるたびに打ち解けて、「おじいさんとの出会いが一番の宝物」と話す子どももいました。

その結果、子どもたちの中には人とのふれあいに興味を持ち「僕たちでもできる、もつと誰かに何かしたい。」という子どももできました。

現在では、指人形の劇団を結成して小道具をつくり、たくさんの人に見て喜んでもらおうと色々な場所で上演しています。



スタッフの津島高校生の皆さん

地域通貨の導入

かつて、私も中学生で今の高校生や小学生のように熱い気持ちを抱き、くじら

飛行のお姉さんたちと活動を共にしてきました。

当時はボランティアという言葉が流行り始めたときで、「偽善者ぶってる」とか「内申書かせぎ」と思われるのが嫌で、迷いを感じたときもありましたが、今では続けてきて良かったと思います。

くじら飛行の人たちは、私たちに、様々な経験や、物事を考えるチャンスを与えてくれました。そして今度はその順番が私にも回ってきたのです。あのととき感じた気持ちをこれからの子どもたちにも伝えたい。そして、多くの子どもたちにより多くの経験をさせてあげ、自分たちが



「清満わんぱく隊」の指人形劇

他人のためにどんなことができるのかを考えるきっかけになればと、平成十三年地域通貨を活動に取り入れました。

まだ実際の所、地域通貨の普及は小さなものですがお年寄りと、子どもの間で、昔の遊びを教えてほしいといった交換がされています。

世代を超えた人間関係

このように地域通貨を活用して、様々な活動を展開していく中で、子どもたちにたくさんの知恵や宝物を教えてくださいとお年寄りや、場を盛り上げ、まとめてくれる高校生、あらゆる面で協力してくださった地域の方々など、地域での新しい結びつきがありました。

年齢も、それぞれにできることも違うけれど、この町が好きで、「誰かのため」に何か役に立ちたい」と思う気持ちは世代を超えても同じだったりします。

いま私たちは、普段接することの少ない異世代との交流で、子ども、学生、大人、お年寄りが地域の中で暮らしていて、それぞれの立場でこの地域で役割を果たしていることに気が始めました。

今後、もっと地域通貨を利用して、世代を超えた親切のやり取りが広まっていくことを願っています。そして、やる

気を持って実践している若者たちが安心して活動できる環境を作っていきたいと思っています。

私の役割はやっと始まったばかりです！



1泊2日の「わんぱく合宿」

「わんぱく畑」の収穫祭



ユニバーサルデザインと まちづくり

独立行政法人建築研究所 首席研究員

古 瀬 敏



ユニバーサルデザインという言葉が最近よく聞かれるようになった。これはいったいどういう意味なのだろうか。また、何が変わるのだろうか。

ユニバーサルデザインとは、「すべての人のためのデザイン」という意味合いである。子どもから高齢者まで、また男女別なく、さらに能力の違いを意識せずに使えなければおかしい、という主張がこめられている。これまで特別なデザインを持ち込むことを不思議に感じなかったことに対する異議申し立てである。特別なデザインが奇異に感じられなかったのは、一つにはそれがかわいそうな人に対しての「お恵み」と一般に受け取られていたこと、さらにはそうした必要性がごく一部に限られていた、といった事情によるところが大きい。

ところが、近年になって大きく情勢が変化した。とくに米国においてADA(障害を持つ米国人に関する法律)によって障害者の権利が認められたことから、権利を形にしようとする動きが加速されたものの、それに伴って利害の衝突も露わになってきた。障害者が望むほど急速にものはめは変わらなず、一方では制約条件がのしかかり、もう一方では異なる障害ごとの要求がぶつかる場合も増えてき

た。

そうした状況を冷静に見ると、じつはこれまで長い間当然と思われていた前提が間違っていることがわかってきた。「ミスター・アベレージ」と俗に呼ばれる健康で活動的な男性が利用するのを当然としてあらゆるものができあがっていたのである。女性は排除されていたし、高齢者も排除されていた。子どもの存在も意識されることは少なかった。そもそも「ミスター・アベレージ」のケガや体調不良の時のことですら、考えられていなかったのである。そうした点を考慮しなければデザインとしては不十分、あなた自身がその不利益をもちに被るぞ、という指摘がユニバーサルデザインという考え方の基本である。したがって、さまざまな場合に不都合でないようにデザインしておくのは大前提となる。

このやり方は対象が何であるかによってそれぞれ異なるが、自分でお金を出して購入するような消費者製品などでは選択の幅が広いことが最重要であり、自分の必要と財布の中身とを見比べて、これにしようと思えばよろしい。一方、住宅、建築そして交通機関を含めたまちというふうに規模が大きくなるにつれて、個人で勝手に選べばいいといった突き



放すだけではすまなくなる。端的に言えば、駅にエレベーターがなければ大きな荷物を抱えた人、あるいは高齢者や車いすを使う人などはそこを使えないわけだが、そうした状況が続くならその駅はいずれ存在の意義を失ってしまい、廃止の憂き目にあうだろう。

もちろん、ユニバーサルデザインだけですべての人のすべての場合を満足させるわけにはいかないのも当然である。じつはユニバーサルデザインには「価格妥当性」という概念が含まれていて、みんなが納得するような資源（人手とお金）配分が基本なのだが、それだけの判断基準で線を引くと、少数者を切り捨てることにつながる。上にあげた例で言えば、その駅を継続させる価値があると判断するかどうかをソロバンだけに任せれば、利用者が少ない駅にはエレベーターは不要、という答えしか出ない。交通バリアフリー法においても、ハートビル法においても、とりあえずの線引きが一日の利用者数あるいは建築物面積で行われているのは、現時点でそれ以上は強制できない故だが、それで切り捨てられたらどうしようもない場合が起こるのは容易に想像できる。

そこで出てくるのが、生活にとって必須か否かという判断基準で、これによっ

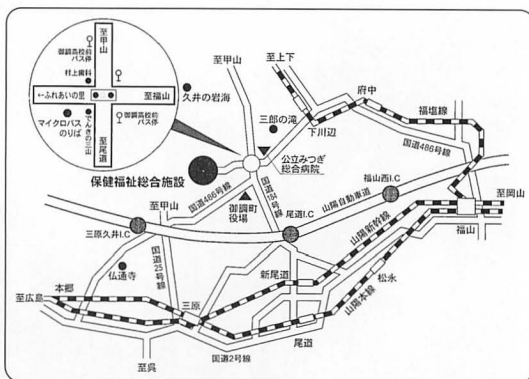
て認められれば追加や特別な対応が可能になる。じつは従前の障害者対応は、この意味におけるもの（バリアフリーと言われていたものの大部分）と、先ほどから議論しているユニバーサルデザインとが混同されていた。ユニバーサルデザインは障害者対応であると言った瞬間から、「われわれと彼ら―障害のない私たちが障害を持ったあの人たちを助ける」、という昔からの抜きがたい誤解に舞い戻ってしまう。ユニバーサルデザインは本来そうなっていなければならないことを意味するのであり、一方の特別な対応のことは自立支援技術（カタカナではアシスティブ・テクノロジ―）と言葉を使い分けなければならない。電動車いす、携帯型の酸素ボンベなどはまさにこの自立支援技術であるが、周りがユニバーサルデザインでできあがっていることによってこうした自立支援技術の効果は劇的に向上することを忘れてはならない。ごく一部の駅しかエレベーターがなければ、電動車いすでは移動経路が限られ、時間も多くなる。しかしユニバーサルデザインの理念によってすべての駅にエレベーターがあれば、誰もがほぼ同じ時間で到達でき、同じ時間だけ外出先で楽しめ、同じだけ消費するのだ。どちらが全員にとってよいか、言うまでもあるまい。

いきいき御調



みつぎ
広島県御調町
公立みつぎ総合病院 リハビリ部次長

村上 重紀



老後安心して住めるまちづくり

御調町は、尾道市の北部に隣接した水と緑の豊かな、また人心のどかな農村型の町です。人口は八千二百人、高齢化率は二十九%です。少子高齢化の進むわが国の二十五年後を先取りした町と言えるでしょう。

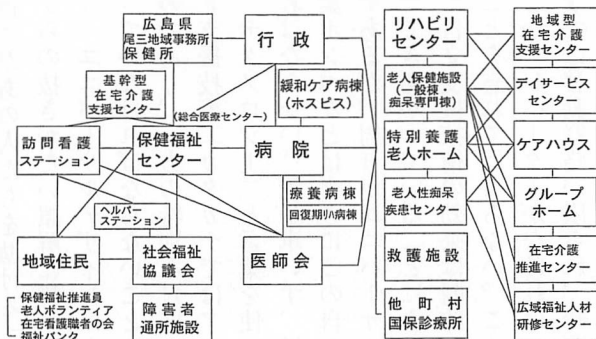
「老いても安心して住める町でありたい」、そんな願いは誰でも同じものだと思います。公立みつぎ総合病院（二百四十床、十六診療科）は、そんなまちづくりを推進すべく、診療圏域七万人の地域の中核病院としての役割を果たしてきました。

病院の理念は、「地域包括ケアの実践と住民のための病院づくり」です。地域包括ケアとは、疾病の治療だけではなく、予防から健康づくり、そして在宅ケア・介護・リハビリまでを包括的に行い、地域住民のQOL（生活の質）の向上を目指すものです。

そのためには、保健と医療と福祉、介護が縦割りでは良い機能はできません。それぞれが共通の目的に向かって効果的に連携する必要があります。町では、三十年余の歳月をかけ、少しずつ保健・医療・福祉の連携・統合システムを築いて

きました。現在の御調町における地域包括ケアシステムは、次の図のようになっています。この構築の最初の槌音のきっかけにはいわゆる「寝たきり」の問題がありました。

御調町における地域包括ケアシステム (保健・医療・福祉の連携・総合システム)



寝たきりの多い町から

「寝たきりゼロ」へ

昭和五十年代の前半頃まで、御調町はいわゆる寝たきりの多い町でした。病気が治って退院したお年寄りがいつの間にか家で寝ついてしまっている。それは、多くの場合、家庭の介護力の不足や、介

護や生活の仕方の不適切さ、そして適切な看護やリハビリテーションの中断などに原因があるようでした。つまり、寝たきりは、病気や障害の重さには関係なく、他の要因によりつくられた寝たきりが多いことが分かってきました。

寝たきりになると、本人はもちろんのこと家族の生活も困難な状況になってきます。特に、直接の介護者の心身の負担は大きく、また高齢者が高齢者を世話するという「老老介護」の場合が多いため、長年の介護生活の中で共倒れになることも少なくありません。

そこで、御調町では、病院から看護師やリハビリの療法士が家庭に出向いて、看護処置やリハビリ指導を行い、住宅改修や福祉用具の活用で療養環境を整え、介護や生活の仕方を家族と一緒に考え、また介護者の心身の健康管理を行うことを始めました。この「出前医療」は現在の介護保険制度下では訪問看護や訪問リハとして当たり前の在宅サービスになっていますが、当時は全国でもまだ稀な試みでした。

また、併せて介護予防のための健康づくりにも取り組む一方、食生活の改善や介護、配食等に協力するボランティアの確立などを図り、住民が直接参加するネ

ットワーク化を進めてきました。こうした町の寝たきりゼロ作戦により寝たきり者の数は三分の一に漸減し、その充実を評価されて遠くの都市部から御調町へ転入してくるいわゆる「介護移住」の方も増えています。

まちづくりの大切な一翼を担う

このような御調町での介護予防への取り組みや、早期リハ、生活リハビリの推進、保健事業である機能訓練事業やデイケア等の活用による閉じこもり予防の展開は、当時の厚生省の「寝たきりゼロへの十か条」の下敷きとなり、また、ハード・ソフトを効果的に連携させた実践は、現在の介護保険制度のモデルともなりました。以前から御調町の地域包括医療は注目されていましたが、今でも全国から町へ訪れる行政や医療関係の視察者の数は年間三千人にのぼり、医療費の伸び率の鈍化と併せ、町や近隣地域の経済面にも寄与しています。

ひとが住みよい町の条件として、自然や住宅などの環境、文化、産業・経済、教育・子育て、交通の利便性や治安、そして保健や福祉・医療等があげられるでしょう。御調町の地域包括ケアシステムの成果は、住民の健康や安心を支えるだ

けでなく、各方面にも影響を与え、また雇用の確保など過疎化の歯止めの一助となり、町全体の活性化に貢献してきました。

先に制定された国の健康増進法にみられるように、これからは病気にならないようにすることも医療の大事な役目になります。御調町では既に取り組んできていることですが、今後ますます充実化を図り、住民の心身の健康を守り、老いても、障害をもっても、安心して暮らせる町を目指し、「ひとと自然が光るまち」づくりの一翼を担っていきます。



公立みつぎ総合病院と保健福祉センター

引き算型まちづくりの事始め (六)

「公務員の不作為」という言葉がある。不作為とは、国語辞典には「なすべきことをしないこと」、さらに不作為犯とは、ある行為を実行しないことによつて成立する犯罪とある。法律として論じるときには、それなりの科学的な論拠に基づいて使われることであろうが、すでにいくつかの判例で立証されている。詳しいことは平成十四年十一月八日(金)愛媛新聞の社説の欄をこゝ読いたいただきたい。公務員の立場で、為すべきことを為さなかったことによる国民の被害の事例が縷々説かれていた。ここでは、「お目こぼし」

が「いろいろの見返り」として認定されている。いずれも上級の国家公務員であり、行政上の執行権限を持つ立場の人たちが、当然為さなければならぬことを為さなかったことが、刑事罰としてその罪に問われることになった。

私たちのような、市町村に働く立場の公務員には、関わりのないこととして見過ごしてしまうかもしれない「公務員の不作為」は、深く地域住民と接してみると、ことの大小は別にして、事例としては少なくない。それは公務員個人としての不作為というよりは、行政として組織で固められた集団の不作為というべきこ

とかもしれない。住民の暮らしを守るために、いろんな要求が行政(担当者)に投げかけられる。「今担当者が外出しています」からはじまり、「予算がありません」と答えるし、「他にも同様の事例が多く対応し切れません」と、心ない対応が返ってくる。

さらにはこんな話だつて現実の姿として存在する。ある住民から「野良猫が増え、その被害に遭つている。役場で何とか考えて欲しい」。当然の要求であろう。このことに關して行政からの回答が面白い。「野犬には取り締まる法律があるが、野良猫に対しては法律がありませんから、何とも仕様がありません。」このような会話が日々繰り返されている。そして、役場は何をしているのかといった不満の声が聞こえてくる。

市、町、村という地方自治体が、こうした住民の声を聞き、何らかの措置を講じるのは、国の法律の有無に関わらず、住民の暮らしを守るための当然の義務として取り組まなくてはならないだろう。そこには法律がなければ法律の制定を求める一方で、住民に直接接している町役場、村役場が負担すべき事務として対応することが担当者、担当課の責務である

はずである。にもかかわらず逃げている感はない。

職員から見れば、確かに格好いい仕事は楽しいし、自分のやってみたい仕事を与えられると、ことのほか充実した気分になる。煩わしい、汚いといった仕事は誰だつて嫌なものである。好むと好まざるに関わらず、住民からは嫌われなければならない仕事だつてある。こんな職場の環境から、職員レベルでの事務内容の平等性や均衡を図ることを目的にして、「短期の人事異動」が不文律の制度になっていることも否定ではできないが、かといって、その場限りの言い逃れ、あるいは「やらないことをやれない理由でもって説明する」。さらには国や県への責任の転嫁でその場を繕つてしまう。結果として住民が求める要求は後回しになってしまう。そして担当者が替われば元の木阿弥である。

よく公務員の処世術の一つに「遅れず、休まず、働かず」といった言葉で公務員を揶揄されるが、当たっているだろう。働かなければミスもなからうし、慣習に従い「前例がない」ことが理由になって、「結果は何もしない」という事なかれ主義は、職場の中を眺めていると、どこに

も見られる現実の姿である。

何もしないとか、自分の職責ではないといつても、評価の仕方や価値観の違いから生まれることで、住民から提起される真摯な様々な意見は、自治体に働くものにとつては、等しく自らのこととして受け止める必要があるだろう。本来「係り」の盟回し自体が不作為のもとをつくるが、誰も責任を感じない。黒澤明監督がつくった映画「生きる」(一九五二年)の中にもこうしたシーンが出てくるが、志村喬が演じる市民課長の、市民に向けた公務員のあるべき姿を、もう一度見直したいものである。

私がよく耳にする子育て組の若い夫婦から聞かれることに、保育所への入所にかかる保育料と、幼稚園におけるそれにあまりの隔たりがある。高い人であれば月額が五万円を超えるし、平均しても二万円前後の保育料になってしまう。一方で、幼稚園はといえば月額五千円程度のものになると、その実態については容易には説明ができない。本来積算の根拠が異なるのであるから、結果に差が出るのは当然であるが、保育料であれば所得税という納税額が根拠になっている。さらには所得税に見られる所得捕捉の矛盾がこんな結果を生むとすれば、やはり黙ってはいたくない。「九、六、四」とか「十、

五、三、一」といわれる所得捕捉の在り方は、給与所得者にとつてことのほか厳しいといった批判が絶えないが、他にも多くの矛盾を抱えたままで時が経過している。

「文部科学省と厚生労働省との管理の違いです。」とか、「国の基準ですから仕方がありません。」といつても説明にはならない。進んだ自治体では、すでに幼保を一体化した取り組みが進み、保育料の矛盾に対する是正が図られている。何が原因で他の自治体にこの成果が波及しないのかは、調査不足で不明であるが、私流にはこれらも行政の不作為の一端としか思えない。原因に対する責任の所在は不明だしながらも、一方でこの矛盾に対して不満を抱きながらも、現実の暮らしの課題に直面している子育て家族は、安くない保育料に思いを馳せながら日々を送っている。

こうした、制度によって様々な矛盾が行政サービスの中には結構多様に存在している。ことは受益者である住民から見れば、不作為による行政サービスの不均衡になっているという現実である。まちづくりだ、地域づくりだといって、住民の行政への参加の在り方が賑々しく論じられる一方で、こうした矛盾に対しては何ら反応を示さない行政の姿勢は、およ

そ開かれた行政とか、住民本位の行政といつても虚しさを感じるばかりで、ここにも行政改革の必要性を論じて欲しい。

結果論で批判することは良いこととは思わないが、市町村という行政府で働く公務員の不作為がもたらした好ましくない実例は多い。このような言い方をされると反発する人は少なくないであろう。それは、長年にわたって習慣づけられた行政組織の常識であり、考え方でもあろう。こうしたところにも負の要因としての捉え方が求められるし、引き算としてこの慣習を払拭したいものである。

今公務員社会には、「安住」が蔓延してはいないか。安住とは、「向上心を失い、中途の段階に満足してしまうこと」(新潮国語辞典より)とある。安心とは異なる。安心という抛り所が誤解されている。まちづくりでみる安心とは、行政組織経営、コミュニティ経営の安定のもとに存在するもので、安定への努力の結果の上を感じるものでなければならぬ。職場をはじめ、地域社会に不安や不満が堆積されるところには安心はない。

内子町 岡田 文淑

「10kgのりんご？ そんなにいらない。それよりもたくさん種類のものをちよつとずつ欲しい」「なるべく安く買いたい」「いや、安心安全なものだったら少々高くてもいいから」「農家つて自分の家で消費するものは農薬をかけずに、出荷するものについてはジャンジャンかけてるんじゃないの？」…久万町でりんごとぶどうの果樹園を営む我が家のホームページを作ってから、本当に様々な消費

も消費者も、何が真実なのか選択に迷っています。「問題」が起こる原因になったのは、「情報の共有」が流通構造の中からすつぽりと抜けてしまい、農家の、中間流通機関の、そして消費者の「顔」がお互い見えなくなってしまったからではないかと考えます。

私も農家の方自身にも「情報発信の手段」を持っていただき、自らの意志と力で自分の農業を伝えていっていただきたい

農業が元氣じゃなくっちゃ！

久万町 農家Web企画制作

竹森 まりえ



者の声が聞けるようになりました。改めて消費者ニーズが多様化していることを実感しました。同時に、近年の流通構造の中で、農家と消費者が「距離も心も」離れてしまったということも改めて感じました。

「このままじゃいけない」…。BSE問題、産地偽装、違法農薬…農業を取り巻く環境の中から、今本当にたくさん問題が浮上ってきています。農家自身

いと思っています。そして、その意志を持つている農家の方のホームページ制作のお手伝いをしています。その農家のお宅に数日間ステイし、実際に生活をともしして取材を行うのですが、農家は「この野菜のおいしい食べ方」「天気の見方」「加工方法」など本当にいろんな情報をもっているんですね。消費者はこれらの情報を本当に喜んでくれます。栽培のポリシー、農作物に対する愛情のハナシな

どもちゃんと伝えることができれば、消費者への「信頼」につながります。消費者からの声を真剣に聞き、本当に何が望まれているのかを考え、改めて自分のポリシーを確かめることにもなります。

こうして、「自分のポリシー」を明確に持ち発信する農家は、「農業は苦境に立たされている」と言われながらもしっかりと自分の意志で行動しています。そんな農家のお一人がこんなことを言ってくれました。「第一次産業が元氣じゃないとね。地域づくり、国づくりは始まらないんだよ」。本当にそう思います。一人でも多くの農家の元氣な「顔」を、全国に送り出すお手伝いをしていきたいと思っています。



北海道のユリ栽培農家「樽井農場」でユリの品種札を作るお手伝い

私がムーブメントに出会ったのは、二〇〇〇年の夏だった。娘のピアノの先生が、ムーブメント教育理論の講義が今治であるからと誘ってくれたのが始まりだった。二日間におよぶ講義は、素晴らしいものだった。

ムーブメントというのは、障害児教育理論で、アメリカのフロステイニング博士によって体系づけられ、今から二十年前に現横浜国立大学教授小林芳文氏によっ

私流のまちづくり

波方町

越智 文香



て日本に紹介されたものである。

内容を簡単に言うと、楽しいということとを前提にして、集団で身体を動かすことを通して、知覚能力や情緒、社会性、さらには、高次な認知能力や創造性を育てようとする理論である。風船を使ったり、ボールを使ったりして、とにかく楽しい。

一年半、障害児を対象に教室を開いていたが、参加者が少なくなったため、今

はお休みしている。これを充電期間と考えて、もっと勉強して、私自身、人間として成長することができたら、心を開放するための手段として、ムーブメントを再開したいと思っている。

また、どなたか呼んで下さったら、イベントの一つとして、ムーブメントをやらせてもらいたいとも思っている。

最近では、地域づくりリーダー育成研修会の際に一回、その研修生の村尾さ

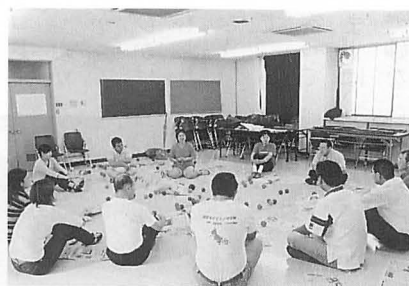
んの紹介で三回ほどムーブメントをさせてもらったが、とても楽しかった。

私の近況を書かせてもらうと、美容室に来るお客の子どもさんを、予約が入ったときだけ託児をし（週三回程度）、夜は、週三回家庭教師をしているほか、障害児の団体である「今治市手をつなぐ親の会」の役員をしている。今年の三月頃に、ハルデイを持ちながらプロの演奏家として活躍している「JOY倶楽部ミュージック

クアンサンブル」を招待して、コンサートをしようとして動いている。結構忙しいが楽しい。だから、相変わらず太っている。こんな日々を送っている私だが、私のやりたいことは、前と少しも変わっていない。

まず、やっぱり家族を大切にしていきたい。外で素晴らしい活動しても、それが家族の犠牲の上に成り立っていると感じたら、即やめる潔さを持つ。でも、なるべくやめたくないで、活動に家族を巻き込んで一緒に楽しむようにしよう。そして、人と接するときには、表面的でなくもっと深いところで接して、人を大切にしていきたい。

こんなところから、私のまちづくりは始まっている。



ムーブメントの一場面



③



②



④

久しぶりに大きく発達したワイバー(写真①)を発見。ここは増穂地区の繁近あたり。この物件はウォッチングの初歩ですが、初めての方にチョイト説明して

お次は飾り瓦。津島のかつての庶民生活も、豊かな文化を育んでいた。吉井にある山本家には恵比須顔(②)。追ノ川の谷脇家には見るもアツパレ扇の瓦(③)。

おつとコレはどこだったか、空に向かつて何か呼びかけてる鯉もおりました(④)。続いて三島神社へ寄ってみる。まずは、入り口で妙な常夜灯が出迎えてくれる(⑤)。笠石や請台(うけだい)、台座などが絶妙の形をした自然石で、何ともバランスがいい。まるでキノコが何かマッシュルームの頭のように。この石は津島ならではの地元の石で「まつこう石」という固有の名が付いている。聞けば山から掘り出すのだそうだが、独特な造形に人気があるものと見え、町内には灯籠や庭などそこかしこで見受けられる。聞くところによると、アノ田中角栄氏が絶頂の頃、目白御殿の庭にもこの石を贈ったことがあり、今も座っているに違いないとかナントカ。どういう経緯でこうした形の石が自然に出来るのか、津島の地質学の方にも興味広がる。機会があれば調べてみたいものだ。その常夜灯のすぐ横には社名柱(⑥)が

“MY TOWN” うおっちゃんぐ

歩キ目デス & 足ラデス

第22弾

津島町ウォッチング・パート2

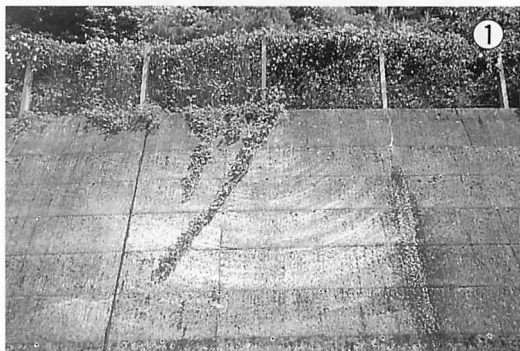
「共生と調和を楽しむ」



岡崎 直司

おこう。山がちな地形に道を付ける場合、こうしたコンクリートの擁壁(ようへき)が出現し、そうした時によく見かける。この写真のように上から植物が伸びてきて、風に揺られてブラリブラリ。またはその水抜き穴に、ある時どこからか種が飛来しやがて成長、擁壁に扇状の模様をつける。その形からワイバーと呼ぶ。言わば、植物の成長記録。童謡「せいくらべ」を思い出す。♪柱のきずはおとしの 五月五日の せいくらべ♪ ともかく、地形と植物の生命力、そして風の作用で生まれる偶然のアート。

おつとコレはどこだったか、空に向かつて何か呼びかけてる鯉もおりました(④)。



①



立っているが、これも少し変わっている。

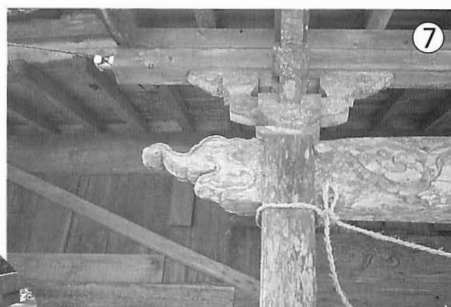
頭に描かれた文様が妙。これは西洋のデザインではないか。一応村上水軍ゆかりの大山祇神社系列である三島神社の「折敷縮三」という正統な紋章が入っているが、アカンサスをあしらいたいメダリオンの装飾仕立てであるのが凄い。神社の入り口にヨーロッパのデザイン。日本の文化は何でも吸収してしまい、こうして何事もないかの如くに存在させる、実に器用な共生文化である。

社殿へ上がってみよう。拝殿の両サイドには必ず木鼻(⑦)があって、その造形をじっくり観察するのも楽しい。この神社の場合は「象さん」だった。モチロン左右一対モノであるので、狛犬と同じ阿吽になっているのは言うまでも無い。でも、「なぜ神社に象さんが居るのだろう?」と考えを巡らすのは、この場合実に重要だ。象と日本は、フツーは余り結

びつかない。もともと太古の昔、ナウマン象が居た頃にまで遡れば話は別だが。だとすれば何故。アフリカかインドか。インドと言えは当然仏教である。お釈迦さんの側には常に白き象が付き従っていたという。象は仏教と共に日本に伝えられた。でもここは寺でなく神社。答えは、奈良時代から始まる神仏習合。こんな所に神と仏が調和している。

調和と言えはこれもそう。津島の刈り込み文化(⑧)。どこの家の庭を見てもとても綺麗に剪定が行き届き、イヤハヤそれにかかる労力と情熱はなかなか半端ではない。他の地域よりも優しく几帳面な人がきつと多いに違いない。

最後に、この夏津島の隅々を案内下さった綺麗ドコロにも登場願って、津島魅力探しの締めくくりと致します。(⑨)



中ノ川橋(山財馬淵)の欄干手摺りはベンチスタイルのグッドデザイン



岡村さんと山本さん



キャンペーンおばさん！

(その2)

松野町 隅田 深雪

今秋の滑床は、秋を満喫する間もなく、“冬”になってしまいました。十一月初旬の冷え込みで紅葉は例年になく鮮やかでしたが、強い風が災いして下旬まで残る紅葉もすっかりなくなり、十一月九日には鬼が城山系は一ヵ月半ぐらい早い初雪となりました。猛暑の夏、短い秋、早い冬と季節も経済状況に比例して混乱の模様です。“キャンペーンおばさん”は、九月に広島、十月は福岡・広島、十一月は北海道・広島と、体力に物を言わせて走り回りました。

二回目の原稿もまたまた懲りることなく遅れて、担当者の方にお詫びのFAXを入れる始末。次号は“地域づくり”について書いてくださいと依頼を受けましたが、現在の松野町も五年足らずで、地域の方々との付き合いも皆無に近く、観光公社の職員として松野町「森の国ホテル」を売っているのが現状です。地域の方々との接点も小さいので、現在感じていること、各地を見てこれからはこんな暮らしがしたいなと感じていることを書かせて頂きます。

私が暮らしていますのは、滑床溪谷の下流の“目黒”地区、滑床山と高知県西土佐村の県境の山里です。今の季節は、川霧が出て刈り取りの済んだ田を覆い尽

くします。星の数はいっぱい、天の川は手に届くようで、蛍が部屋の中を飛び交い、朝焼けで空は真っ赤になり、都会の人からは考えられないような絶品の大好きな環境で暮らしています。この地区もご多分に漏れず、高齢化、過疎化が進み、中学校は統合され、小学校も二十数名の小規模校となっています。しかし、小学校の運動会、発表会は校区民総出でにぎやかとなり、夏祭り、秋祭り、収穫祭と小さな地区での地区総出の行事は皆様のがんばりで毎年受け継がれ、祭りの伝統は子供達にも伝承され、しっかりと自己主張をしている地区です。農家の方が丹精こめて作られました、米、野菜、漬物、味噌等は「森の国ホテル」のお客様に賞味されています。

ここ十数年ほど、“歴史と文化を生かした地域づくり”が合言葉のように提言されていますが、具体的な手法は不透明なまま、今は合併論議一色となっています。現在の市町村も明治以来合併を繰り返して現在に至り、また平成の大合併に入ろうとしています。が、大上段に構えた“地域づくり”を叫ぶ前から、小さな地区では綿々とその土地特有の習わしは受け継がれ、情報過多の現在も他に惑わされることなく、良い意味で頑なに守られ

ていると思います。しかし、雇用環境の未整備の田舎に若い人が戻ることは難しく、「習わし」が引き継がれることは残念なことにも心細い状況となっています。

「地域づくり」は、「田舎」のための言葉のようですが、東京も大阪も北海道も四国も、一つ一つの地域に変わりはなく、住民自身の合意により「住みよい街づくり」をすすめるべきです。合意の中には、当然住民の権利と義務が大きく反映されることは言うまでもありません。今年の夏には、強力な「女性」パワーで開催されました、「女性フォーラム 地方からの幸せづくり」の会に出席しました。「青森空間創造女性会議 代表 北村真夕美」というすごいパワフルな女性が企画された会です。主旨は地域づくり、社会資本整備に地方の女性の声を届けようと七月に東京で、二回目は十一月に帯広で開催され、全国で積極的に地域づくりに取り組んでいる女性六名がパネリストとなり、各地域の状況を比較しながら、社会資本整備の必要性が論議され、今後この会を各地で開催したいと準備しています。まちづくりのリーダーシップは、パワフルな女性たちが担っています。地域活性化の柱と言われる道づくりの論議が活発な中、方法論としては数々ある

うかと思いますが、今まで「道」はお上に造ってもらうもので、私的意見は言う場所も分からないのが現状であったと思います。しかし、この論議の中で道づくりを国民が考え直す非常に良い機会になったと思います。私を含めて。

最近、数々の地域環境を目にして改めて感じるがあります。北海道は道が広くまっすぐで良いけれど、日本の穀倉地帯の十勝地方から作物を運び出すのに幹線道路は一本しかなく、災害で寸断されたときは何百kmも迂回しなければいけないのが現実で、がんばっている農家の方がつくった作物も道路がなければ届きません。「介護通勤」なる新語が生まれ、田舎に生活する親を見舞うのも道路ありきで、短時間で通勤できれば生まれ故郷の田舎に住んで、自然の中で子育てもできる。やっぱり道がなければ活性化の言葉は現実にはなりません。しかし、すべての地域に同じ規格では要りません。地域が判断をすべきです。

車社会から言えば、地方のほうが一世帯当たりの車の数は多いのです。田舎は公共交通機関が採算性から廃止・縮小され、病院に行くにも朝のバスで出て夕方しか帰れないのが現実で、農作業に軽トラも必要で一家に人数十一台が平均所有

台数です。「高齢者は車に乗るな」は都市の論理で、ゆっくりでも自分で運転するか、福祉バスが充実しなければ生活が成り立ちません。

「今まで「造ってもらった」道づくりを皆で考えましょう」、「『ボランティアサポート制度』があります」、「わが町わが道」の視点で、周辺の道環境を自分で整備しよう」といういう取り組みです。色々な事柄について、「NO」と言える勇気も大切です。スピード優先、造って消費することを今一度皆で考え直す時です。必要なものと、不要なもの、大切なこと、すべての社会の中で自己確認を忘れていませんか。

「スロライフ・スローフード」の言葉がブランド化しつつありますが、特別なものではなく、それが普通になる生活が良いですね。忙しい子供達のためにも「四国はゆつたり」を感じてもらいましょう。「森の国まつり」の自然を大勢の方に体感していただきたく、「キャンペーンおばさん」は今日もがんばります。それが私のまちづくりです。

〰冬の滑床 風便り〰

イベントについて考える

研究員 池田 大作

イベントがもたらす・・・

(財)地域活性化センターが主催する地域イベント実務研修会に参加した。(九月十一日から十三日)

講師は、二瓶長記氏。最近のイベントの状況から・・・。「全国のイベントの数約五万から六万。その大半は、よそで行っているイベントを見て成功したものや良さそうなものを取り入れ実施している。」確かに、どの地域に行っても似たようなイベントをお目にする機会が多々あるのではないだろうか。

急に話は脱線するが、十月に九州ツリーズム大学(大分県小国町「木魂館」で開かれた。)に参加した時のことを思い出す。「日本の文化は、大和と琉球に別けられるのではないか。」と宮口侗延氏は言っている。顕著な例を挙げると、九

州から東北にかけどこでも田園風景を見ることが出来る。本来、寒い地域では稲作は不向き。時代の流れとはいえ・・・。

分野は違えど、大和に生きる人たちは、いつの間にか自分達で考えることをやめたのではないだろうか？似たような地域で成功するとあたかも、自分の地域も成功すると勘違いしているように思えてならない。

さて本題に戻るが、イベントを企画する時、何を考え企画しているだろうか？単発的なイベントの集合体になっていないだろうか？核となるイベント、それに付随するイベントとの取り合わせを考えているだろうか？単発ばかりだといくら続けようが効果は見えてこない。イベントは実施した後、何らかの形で効果が現れないと意味を成さない。交流人口・経済、色々な効果が期待できる。効果がな

いということは、どこか必ずズレが生じているはず。

しかし、地域住民にも問題があるので、は？

「行政が何とかしてくれる」という安易な考えを持っている人がいるように思う。若しくは、参加もしないで批判ばかりしている人が・・・。

これからのイベントはそこに住む住民が主役。行政はお手伝い程度でかまわない。行政が発想することなんかたががしれている。視線はいつも首長・・・。

たくさんさんの若い人・たくさんさんの女性が企画から携ること、意見を尊重する場所を作ること、これこそ今、イベントを考えていく上で、最も重要なこと。

その場のしぎは、時代遅れだ。

イベントをすると、

次は観光・地域産品・・・

次いで、地域産品、観光おこし研修会に参加した。(十一月十四日から十五日) 講師は、前田 豪氏。共に元気になる観光地づくりと銘打って始まる。現在の公的宿舍の稼働率約十五パーセント。民営化すると即、潰れる状態・・・なぜこのようなことに? 需用に合わせて供給されていないからである。門限があったり、金額に対してサービスが低かったりなどなど。

最近、注目を集めているのは、ワーキングホリデー、滞在型就労である。また、以前流行った〇〇巡りといった形のツアーは右肩下がり、最近は一箇所に長く滞在する傾向がある。

観光に来て最後にすることは? そう、お土産の購入である。そういった特産品・物産品で勝負・成功する秘訣は? 例えばお土産を買って帰るとき何を考えて選ぶか? だいたい観光客は、「物語のある物」「形に残るもの」「近所・同僚に配るもの」を考えていると思う。物語・・・偉人や空想の物語を利用していいもの。形に残るもの・・・どの年齢層にターゲットを絞るかで左右されるが、

子供に合わせることが多いと思う。人気キャラクターご当地バージョンが良例ではないだろうか。近所、同僚に配るもの・・・当然、食べ物を中心となるであろう。問題なのは、知名度があるかないかで売れ筋が違うと言うこと。かつこたるブランドがあれば特に何もしなくても売れる。長崎の「カステラ」や仙台の「牛タン」。他にもその地域に行くとこれしかない! という特産品が全国に多々ある。クッキーのようなお菓子は定番であるが、地域の特色を出すにはいささかお粗末。金額もさることながら、入れ物や包装が豪華に見えるものも売れている。ある種、見栄をはる心境を逆手に利用しているのではないだろうか。金額を平均すると、近所に配るものでも八百円、同僚でも千二百円までがいいところである。また、購入するのは主婦でいたい五十代。買い手の心理を読まないと、売れるものでも売れないから今一度、買い手の気持ちで売り出す必要がある。

ならば、どうPRしていくか・・・。

即効性を求めるならマスコミを利用するしかないだろう。しかし、話題性がないと取り上げてもらえないのでなかなか利用できないのが現実。その点、少しずつでも着実に伸ばしていくためにも、口コ

ミが間違はなく効果的であろう。しかも、話題になると、マスコミから取材に来るから一石二鳥。

研修を受けて自分自身が思っていることを書いてしまった所が多々あるので、参考にならないと思うが・・・。

これからの、イベント・観光・地域産品、個性がないとなかなかうまくいかないと思う。あまりに、似たようなものばかりで実に面白くない。一度、白紙に戻して考えるのも一つの選択肢になるのではないだろうか。

温故知新・・・故きを温ねて新しきを知る。今がその転換期ではないだろうか。良いころの思い出に浸るのも悪くはないが、そろそろ新しいことに取り組むことが必要な時ではないだろうか?

何もないと思いついでいるだけで、実は身近に何でもある。地元を最大限利用できるように、まず手始めに地元の物語でも作ろうか・・・。

住民が参加しやすい環境づくり

研究員 奥山 清司

最近、「住民参加のまちづくり」という言葉をよく耳にします。

これは、社会のニーズが多様化・高度化する中で、地域住民の意見を行政過程に反映し、互いに協力する必要性がでてきているためだと思います。

ワークショップ

「住民参加」について語られる場合、必ずといっていい程、ワークショップという言葉が引用されます。

そのワークショップとは一体何なのか、やることによって、どれだけの効果があるのか。一度、体験してみたいと思い、昨年八月、実際にワークショップを取り入れたまちづくりを行っている東京の世田谷区（世田谷まちづくりセンター）にてワークショップの基礎的技術習得研修に参加しました。研修では、基本的手法を三つ（ファシリテーショングラフィック

ク・七並べ風ボストリットトーク・デザインゲーム）学びましたが、会議といった堅苦しい雰囲気は全くなく、最後まで楽しみながら行うことができました。

ワークショップとは、何かについてアイデアを出し合い意思決定をする集まりで、会議と違って誰もが自由に意見を言いたいように工夫されています。

参加する方は楽しみながらできるので、企画する方は大変なようで、ただの楽しい集まりで何も決まらなかったという結果にならないよう、参加者の意見を上手く引き出しながら、ある事柄に参加者全員で適切な判断を下せるように進めることが必要だそうです。

ワークショップを企画し開催する際は、始めに参加者にワークショップの目的、位置づけを明確にした上で、正確な判断材料や情報を提示することが大切だと思いました。

それと、実際にワークショップを取り入れてつくった世田谷区の公園づくりの内容についての話も聞きましたが、「ワークショップを進めるにあたって、かなりの費用と時間はかかったが、住民が事業に対してははじめから参加することで、早い段階で問題点も明らかになった。その問題を住民と行政が一緒になって解決すること、完成してから対立することもなく、全体としては大幅なコストの軽減に繋がる。」と言っておられました。

また、「ワークショップを通して地域に関わることで、より地域に関心をもつことにもなる。」とも言っておられました。ワークショップを使ったまちづくりの事例は、公園づくりや、単体の建物の計画など、まだ住民参加の歴史が浅い日本では限られているみたいです。しかしこれからは、アメリカのように普通に大きなスケールの再開発などでも住民参加が進んでいくものと考えられるようで、ワークショップの手法を学ぶことはこれからもっと注目を集めていくものだと感じました。

グラウンドワーク

住民参加での先進地事例として静岡県三島市が挙げられます。前号（74号）

の舞たうん「キラリ光るまち」でも紹介していますが、この地域は、グラウンドワークという手法を取り入れて、「水の都・三島」の環境改善に取り組んでいます。

私も、昨年十月にこの地を訪れる機会があったのですが、本当に町に流れている水はきれいで、ここまでするには大変な苦労があったのだらうと感じました。

この活動は、市民発意による市民運動から、行政や企業を巻き込むという形ではじまっています。今では、グラウンドワーク三島というNPO法人が、市民、NPO、行政、企業の間に位置して、それぞれの利害調整や仲介を行いながら、



きれいな冷たい湧水にしか育たない「三島梅花藻」



住民主体で管理する「境川・清住緑地」



児童がプラン完成した「長伏小学校ピオトープ」

地域のコーディネーターとして提案や実践を行い、活動を進めています。

今までの活動に関わった方は、延べ人数四万人だそうで十一万市民の四割近くが、このグラウンドワーク活動に参加していることになります。

皆さんも、機会があれば一度自分の目で視察にいらしてほしいと思います。

* * *

これからは、NPO等のように住民自らが地域社会活動に参加している場面が増えてくることと予想されます。また、地方分権が進展することから、住民への説明責任の重要性も求められてきます。

その意味でも住民参加はこれからもっともっと重要になってくるでしょう。

さきほど、取り上げた三島市は、市民の地域環境に対する意識が高かったことからあのような活動に発展しており、そこに至るまでには、さまざまな努力があったわけで、いきなりそのような活動をするように思っても出来ないと思います。

まずは、簡単なこと、出来ることから始めていけばいいと思います。はじめに、説明したワークショップのようなものを取り入れるのもいいし、地域に関心をもってもらいような、啓発活動からはじめてもいいと思います。

●『この世の中に役に立たない人はいない』

エドガー・カーン著 ヘロン久保田雅子、茂木愛一郎：共訳
創風社出版 2000円（税別）

本書ではタイムダラーの創始者エドガー・カーン博士が生み出したコ・プロダクションという概念をさまざまな角度から説明している。中でも強調されているものに、市場経済が健全に機能することを背後から支えるコア経済（非市場経済）の存在である。コア経済とは、家事、育児、近隣での助け合い、コミュニティなどで、これを社会のオペレーティングシステム（OS）に例えている。つまり、女性の従属、マイノリティや移民たちを搾取することで成り立っていた古いOSがダウンしてしまった今、平等、相互扶助、思いやりによって組み立てられた新しいOSの必要性を米国各地での事例を挙げながら述べている。

そして、この二つの経済、市場経済とコア経済の関係が上手く機能してこなかったのは、そこに通常の貨幣が介在したからだと指摘する。そこでタイムダラーを介在することで、社会の底辺から信頼を取り戻すこと、コミュニティの再構築が可能になることが明らかにされている。行政と民間のパートナーシップ、協働作業などが問い掛けられている今こそ、本書は地域通貨実践者に限らず、地域の再生を思うすべての人に新しい視点を与えるものと思う。地域に埋もれている人たちにタイムダラーという価値を与え、地域を支える資産と位置づけることで、「役に立たない人」がいない社会が創出される。

本書は3部から構成されており、第1部では、コ・プロダクションの発見に至るまでの経過をストーリー風に述べている。第2部では経済的な理論を、そして第3部では、コ・プロダクションの実践事例を、核となる価値に沿って実際の運営面でクローズアップし紹介している。

本書に流れている、社会正義の熱い思いは、急進派弁護士で、公民権運動の先駆者であるエドガー・カーン博士の40年余にわたる運動の成果である。そしてそれがコ・プロダクションの概念の発見につながり、この概念を実践するツールが信頼の通貨タイムダラーなのだと実感できる。

☆ 最寄りの書店にない場合は、直接創風社出版までお申し込みください。

TEL：089-953-3153



●『グリーンツーリズムとむらまち交流の新展開』

持田紀治編 家の光協会 2,100円（税込み）

「生活者の視点を持った交流のステップアップ」「食農教育のねらいと普及促進の課題」「健康とおいしさをキーワードとした地産地消の推進」など、産官学さまざまな立場から寄せられた、本当に魅力ある「地域づくり」のための提言書。

「本書は、研究者と企画指導の実務に当たっている専門家が参加した産官学の異業種交流による共同研究である。執筆者全員がグリーンツーリズムと農業・農村のよき理解者であり、熱い思いを込めて論文執筆に当たった。この熱い思いは必ず読者に伝わると私は信じている。」（「はしがき」より）



えひめ地域づくり研究会議フォーラム2003

テーマ「地域の自立とは」

—あなたが明日からできること、今、なぜ地域の自立?—

2005年3月、現在、3200余りある市町村の数は、合併によりどれぐらいに減少しているのだろうか……。市町村合併は、そこに住む人々の暮らしについて十分議論がなされないまま、事務的な段階に入ったような気がしてならない。だから今、「地域の自立」を呼びかけたい。「自立した地域」のあり方について話し合ってみたいのだ。

行政規模が大きくなり、コミュニティや地域文化が、より大きなところ、影響力の強いところに吸収されるという危惧はある。また、小規模な自治会の小さな声は、どこにも届かないかも知れないという心配もある。しかしそれは、自分たちの暮らしは自分たちで守りたいという強い思いがあれば、そして、そのことを一人一人が強く意識することができれば良いのではないだろうか。

人に頼る心、行政は何でもしてくれるだろうという依存心、楽なことかもしれないが、それでは自分たちに何も残らない。そこで暮らしていくためには、その地域を好きでいたい。そのためには、与えられることを待つのではなく、何ができるかを考えてみたい。それが「地域の自立」ではないだろうか。

日本中、同じ町になるのは、もうやめようよ。自分たちの足元を学び、知り、伝えていくことは、誰にでもできること。そしてそれは、一人一人の生き方にも関わってくるのではないだろうか。地域で暮らすことの意味と価値を考えながら、地域とそこに住む人々の自立を願い、この会を開催いたします。

■と き 平成15年1月25日(土)

■と ころ えひめ共済会館(松山市三番町5-13-1)

■プログラム 13:00~ 受付
13:30~ 開 会
13:35~ 地域ミニフォーラム報告
14:30~ 基調講演
テーマ:「地域の自立とは」
講 師:緒方 英雄氏

(株)大山夢工房「ひびきの里」総支配人)

16:10~ パネルディスカッション

パネラー 緒方 英雄氏(同上)

亀岡 徹氏(亀岡酒造(株)代表取締役)

若松 進一氏(双海町地域振興課長)

コーディネーター

近藤 誠氏(研究会議事務局長)

17:30 閉 会

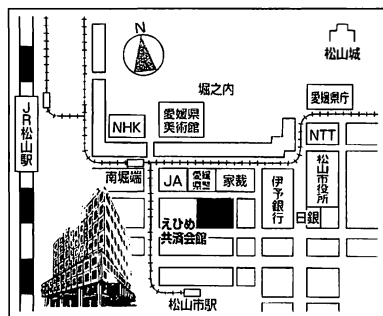
18:00~ 交流会

■参 加 費 フォーラム1,000円 交流会5,000円(希望者)

■申し込み えひめ地域づくり研究会議事務局(えひめ地域政策研究センター内)

T E L 089-932-7750 F A X 089-932-7760 E-mail: info@ecpr.or.jp

平成15年1月17日(金)までに



「松野町ふれあい交流館」

松野町

北宇和郡松野町のＪＲ予土線松丸駅の構内に「温浴、福祉、交流」の３つの機能を持つ複合施設「松野町ふれあい交流館」が、昨年１０月２０日にオープンしました。

1階は福祉センター、観光案内所、展示ギャラリーなどがあり、2階には近くに湧き出した温泉を利用した温浴施設「森の国ぽっぽ温泉」があります。滑床溪谷をイメージした森の湯とレトロな雰囲気虹の湯の2つに分かれていて、1週間ごとに男湯と女湯が入れ替わります。また、屋外には無料で利用できる足湯もあります。四万十川の源流、広見川の清流を眺めながら、ゆっくり旅気分を味わいませんか！



「森の国ぽっぽ温泉」

《営業時間》 10:00~21:00 (札止め)

《休館日》 第2月曜日

《問い合わせ》 松野町ふれあい交流館 TEL (0895) 20-5526

印刷／三創印刷株式会社

(財)えひめ地域政策

研究センター]

発行／平成十五年一月一日

$$\begin{array}{r} \text{F} \\ \text{A} \\ \text{X} \\ 0 \\ 8 \\ 9 \\ \hline 9 \\ 3 \\ 2 \\ \hline 7 \\ 7 \\ 6 \\ 0 \end{array}$$

TEL 089 (932) 7750

まちづくり活動部門

(財)えひめ地域政策研究センター

松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階

790-0003

づくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

(山下)

今号は、発行が新年早々ということもあって、表紙の絵からして正月気分を満喫できるお目出度いものとなりました。

何かと世間では暗い話題の多い中ではありますが、地域づくりの世界では、新しい動きが確実に見られるように感じます。この新しい動きが、より力強い流れとなることを期待する今日この頃です。

本年もよろしくお願いいたします。

☆ <http://www.ecpr.or.jp>

☆ E-mail: info@ecpr.or.jp

本紙は、(財)愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。